

# 断りを入れても短所は隠せない

- 逆接表現が人物の具体的特徴の好ましさに及ぼす影響 -

井関龍太・菊地正

(筑波大学人間総合科学研究科)

Key Words: 接続表現, 談話焦点, 印象形成

談話の中の特定の情報に注意を焦点化させることは、適切な処理の手がかりを与え、理解を促進する (Sanford & Garrod, 1998; Sanford et al., 2002)。一方で、焦点に入っていない情報、すなわち、非焦点情報がどのような状態にあるかは、処理されにくいとの報告もあるが (Baker & Wagner, 1987)、なお明らかでない点が多い。井関・菊地 (2007, 認知心大会) は、架空の人物の性格特性を題材とした、逆接・順接の接続表現を伴う文を用いて、談話焦点の効果を検討した。その結果、逆接表現によってネガティブな特性語から焦点を逸らすと、人物の好ましさ評価が向上することが明らかになった。中立語やポジティブ語から焦点を逸らした場合には効果が見られないことから、焦点効果は語の意味内容を参照しており、非焦点情報は単に無視されるのではないことが示唆された。しかし、焦点がどのようにして人物の評価を変化させたのかは明確でなかった。

本研究では、接続表現の操作によって、非焦点情報の評価が変化するのか、効果は文全体の評価の中でのみ生じるのかを検討する。この目的のため、人物そのものの好ましさではなく、潜在的にネガティブ・ポジティブな評価を促す、具体的な特性についての評価を求める。非焦点情報自体の評価が変化しているのであれば、この手続きにおいても、焦点の効果は見られるはずである。

## 方 法

実験参加者: 24名の大学生及び大学院生 (男性9名, 女性15名)。  
要因計画: 2 (特性語: ポジティブ・ネガティブ) × 2 (接続法: 逆接・順接) × 2 (特性語の位置: 先行・後続) の被験者内計画。  
材料: 井関・菊地 (2007) と同じ 56組の文材料を用いた (Table 1 に例を示した)。これらの文は、“Aは[特性語1]だが、[特性語2]だ。” (逆接)、または、“Aは[特性語1]で、[特性語2]だ。” (順接) という形式であった。Aの部分には、男性か女性の名前を半数ずつ用いた (“和也”, “優子” など)。特性語の部分は、一方には常に中立語、他方にはポジティブ語かネガティブ語を代入した。これらの特性語は、青木 (1971) に基づいて選んだ。先行条件では、非中立語を特性語1、中立語を特性語2の位置に割り当て、後続条件では各語を逆の位置に割り当てた。実験冊子では56の文を提示し、各条件の文が等しい回数現れるようにした。56組の材料の各条件への割り当ては参加者間でカウンターバランスした。結果として8種類の冊子を作成し、これを3名ずつの参加者に無作為に割り当てた。手続き: 各文を読んで、文の述べる人物の具体的な特性がどのくらい好ましいと思うか、5段階で評価を求めた (1 = まったく好ましくない ~ 5 = とても好ましい) 評価を求める文は、“Aが[特性語]であることをどのくらい好ましく思いますか?” という形式であった (Table 1 の材料のポジティブ語の例では、“和也ががまん強いことをどのくらい好ましく思いますか?”)。特性語の部分には、評価対象の文で用いたポジティブ語かネガティブ語を当てはめた。

## 結果と考察

各条件の平均評定値を Figure 1 に示した。2 (特性語) × 2 (接続法) × 2 (特性語の位置) の分散分析の結果、3要因の交互作用

は有意でなかった ( $F_1(1, 23) = 1.85, p = .19; F_2(1, 55) = 3.75, p = .06$ )。しかし、特性語ごとの評価パターンの違いを検討するため、特性語ごとの分析も行った。

ネガティブ語について2 (接続法) × 2 (特性語の位置) の分散分析を行ったところ、位置の効果が有意であり ( $F_1(1, 23) = 8.87, p < .01; F_2(1, 55) = 7.39, p < .01$ )、ネガティブ語が先行した場合に評価が高かった。接続法の効果 ( $F_1(1, 23) = 2.69, p = .11; F_2(1, 55) = 2.91, p = .09$ )、交互作用 ( $F_1 < 1; F_2 < 1$ ) は有意でなかった。したがって、逆接表現はネガティブ語の評価を和らげなかった。

ポジティブ語について同様の分析を行ったところ、交互作用が有意であった ( $F_1(1, 23) = 5.41, p = .03; F_2(1, 55) = 7.39, p < .01$ )。後続・逆接条件は先行・逆接条件よりも評価が高く ( $F_1(1, 23) = 20.43, p < .01; F_2(1, 55) = 16.00, p < .01$ )、同様に、後続・順接条件よりも評価が高い傾向にあった ( $F_1(1, 23) = 3.85, p = .06; F_2(1, 55) = 5.92, p = .02$ )。しかし、先行・逆接条件と先行・順接条件の間に差が見られなかったことから ( $F_1(1, 23) = 1.26, p = .27; F_2(1, 55) = 1.59, p = .21$ )、非焦点情報の評価が低下していたとはいえない。

Table 1 実験に用いた材料の例

### 【ポジティブ語】

先行 - 逆接: 和也はがまん強いが、欲がない。  
先行 - 順接: 和也はがまん強く、欲がない。  
後続 - 逆接: 和也は欲がないが、がまん強い。  
後続 - 順接: 和也は欲がなく、がまん強い。

### 【ネガティブ語】

先行 - 逆接: 和也は知ったかぶりをするが、欲がない。  
先行 - 順接: 和也は知ったかぶりをし、欲がない。  
後続 - 逆接: 和也は欲がないが、知ったかぶりをする。  
後続 - 順接: 和也は欲がなく、知ったかぶりをする。

非中立語に下線を付した。実験冊子には下線はなかった。

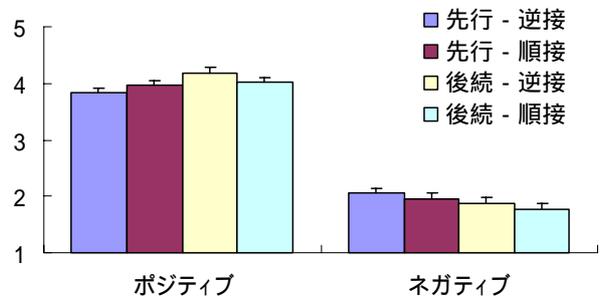


Figure 1 具体的な特性の好ましさの平均評定値 (図中のバーは標準誤差を表す)

本研究の実施に際して、21世紀COEプログラム(こころを解明する感性科学の推進)の支援を受けました。

(ISEKI Ryuta & KIKUCHI Tadashi)

この原稿は日本認知心理学会の許諾を得て転載しています。出典は、日本認知心理学会第6回大会発表論文集 (p. 122, 2008年) になります。